

政府・東京電力と最後まで闘った 双葉郡の巨星 馬場 有浪江町長 亡くなる

馬場有（たもつ）浪江町長が、6月27日に亡くなりました。69歳でした。

馬場町長は、福島第一原発事故による被災者の生活再建と被災地の復興のために、双葉郡8町村長の中で、一番に政府・東京電力と闘いました。原発事故から2カ月経って東京電力の責任者が浪江町に来た時、なぜ直ぐに謝罪の来なかったのかと、東京電力の社長に対して、町民の怒りをぶつけました。

町の公共施設の損害賠償について、東京電力に賠償させたのは、浪江町が最初でした。

裁判外紛争解決手続き（ADR）の賠償請求についても、被災者が個人で請求するのに対して、浪江町は、町が代理人になって、町民約1万5千人の賠償請求をまとめました。これは、浪江町だけです。

ADRでは和解案が提案されましたが、東京電力は和解を一貫して拒否しました。原発事故後7年4カ月が経って、申立人の内800人以上が亡くなりました。

馬場町長が亡くなったことは、双葉郡の町民や原発事故の被災者にとっては、大きな損失です。しかし、私達後に残された者は、原発被災地の復興と、日本にある原発を全基廃炉にするために、馬場町長の意志を受け継いで、より一層頑張らなければ、と思います。

馬場浪江町長死去 69歳 原発事故対応を指揮

「東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後、町民と非難しながら役場機能を二本松市に移転させ、陣頭指揮を執り続けた。昨春、帰還困難区域を除く避難指示解除を実現。住民の帰還促進に向けて小中学校開校など復興に力を尽くしてきた。町民約1万5千人が東電に精神的損害賠償の増額を求めたADRでは、町が代理人になる異例の形で支援。最後まで和解案を受諾しなかった東電に厳しい姿勢を取り続けた。」

古里を思う姿に感服 馬場 有さんを悼む 大熊町長 渡辺 利綱氏

「双葉郡の町長として共に闘ってきた同志であり、大切な友が去ってしまったことは本当に寂しいです。

原発事故による全町避難の中、粉骨砕身、頑張っていた姿が印象的でした。東電に対して精神的損害賠償の増額を求めたADRなど、町民が不利益を被る場面では厳しく対応していました。自分の信念を決して曲げず、外に対して発信力がある人でした。

福島市の入院先にお見舞いした際などに「ゆっくり休んでから戻ってきては」と気遣うと「ありがとう。でも町が心配なんだよな」と。自らの体調より古里のことを思う姿に感服しました。「自分が古里再生をけん引しなければならない」との思いがあったはずですが、でも、もう十分に頑張った。安らかに眠ってください。双葉郡8町村も、これまでも増して手を携えて復興に向けて歩いていくことを誓います。(談)（「福島民報」18年6月28日付け）

【多くの町民が 馬場浪江町長の遺影に記帳（浪江町役場）】



【原発立地自治体ではないのに 今も帰還困難区域のまま（浪江町津島地区）】

